

水戸芸術館
パイプオルガン
活動記録集

1 9 9 0 - 2 0 2 1

つくる、かなでる、ひろがる



水戸芸術館
パイプオルガン
活動記録集

1 9 9 0 - 2 0 2 1

つくる、かなでる、ひろがる

はじめに—— 水戸芸術館のパイプオルガンをめぐって

市制100周年記念施設として、1990年に開館した水戸芸術館。いまや水戸のシンボルともなった高さ100メートルの塔がそびえ立つ広場から建物に入ると、左右に14本の列柱が並ぶ空間の正面2階に、ハチミツ色の大理石を挟み込んだステンドグラスのような窓があり、振り返ると、上部に大きなパイプオルガン(以下「オルガン」とする)が設置されています。

このオルガンがどういう経緯で作られ、置かれたかについて、先ず説明します。芸術館の基本設計が出来る中で、エントランスホールの空間が、天井が高く(11メートル)垂直性の強いヨーロッパの教会建築に似たものとなり、オルガンを設置すると、コンサートホールとは別に音楽を楽しめるような空間になる、とのアイデアが、設計者の磯崎新アトリエから出されました。それを受け、水戸市では施設に新たな魅力と可能性が加わるということから、オルガンを設置することを直ちに決定し、委員会を設け、機種の選定を行いました。

磯崎新、音響設計の永田穂、作曲家の諸井誠という3人の選定委員が、「音楽、演劇、美術の事業を自主企画中心に運営するという、これまでの日本にない文化施設の水戸芸術館」にふさわしいオルガン制作会社として、新進気鋭のオルガンビルダー、松崎譲二、中里威の両氏が設立したマナオルゲルバウを選びました。建物の工事と同時期だったため、オルガンの建造は風雨の影響や、工事から出る騒音など、非常に厳しい環境の中での制作作業となり、制作者には大変な苦勞をかけることになってしまいました。

それでも、開館記念式典(1990年3月21日)には整音、調律も何とか間に合い、小林英之さんのオルガン、田宮堅二さんのトランペットの音色がエントランスホールから建物全体に鳴り響くのを聴いて、やっと一安心できました。

エントランスホールにオルガンを設置したことは大成功でした。コンサートホール内にオルガンを置くことは国内でも数多いですが、コンサートホールでは、残響時間が1.6～2.0秒で音響設計がされています。ヨーロッパで教会音楽用の楽器として発達してきたオルガンは、残響時間の非常に長い教会の中でこそ、その豊かな響きを味わうことができるもので、具体的な残響時間でいえば5秒とか7秒とかの教会堂でこそ、その特性が発揮できてくるのです。水戸芸術館のエントランスホールの残響時間は、空席時で4.0秒、満席時で2.3秒を目標に音響設計されており、そのために教会空間さながらの音の響きを楽しめるようになっています。

芸術館のオルガンの利用方法は3つあります。1つは、仮設壁を出して、エントランスホールを独立した空間として仕切り、1階2階に約200席のイスを並べてオルガンコンサートをじっくりと聴いていただくかたち。次に、仮設壁を出さずに、オルガンの音がエントランスホールから2階ロビーまで鳴り響くかたちで、週末に入場無料のプロムナード・コンサートを実施しています。そして、休館日や閉館時間を活用して、幼児にオルガンを親しんでもらう見学会やオルガンを学ぶ人たちが練習を行っています。

上記のように、水戸芸術館のオルガンはいろいろなかたちで使われており、国内に約1,000

あるといわれているオルガンの中でも最も頻繁に利用されています。その結果、プロムナード・コンサートに出演したオルガニストから数多くの名演奏家が生まれ、「市民のためのオルガン講座」の参加希望者は年々増えています。

このたび、30年以上にわたり、マナオルゲルハウ、多くのオルガニスト、そして聴衆に守り育てられてきた水戸芸術館のオルガンのこれまでの活動を広く知っていただくために、その概要をまとめました。

この冊子によって、2000年以上の歴史を持ち、モーツァルトが「楽器の王様」と称えたオルガンという楽器に興味や関心を持っていただき、その音色を楽しむ人が増えるようになれば、水戸芸術館にとっても幸いです。

水戸芸術館副館長
大津 良夫

CONTENTS

つくる

- 06 インタビュー 松崎譲二&中里威(オルゲルバウマイスター)
- 14 マナオルゲルバウ工房探検

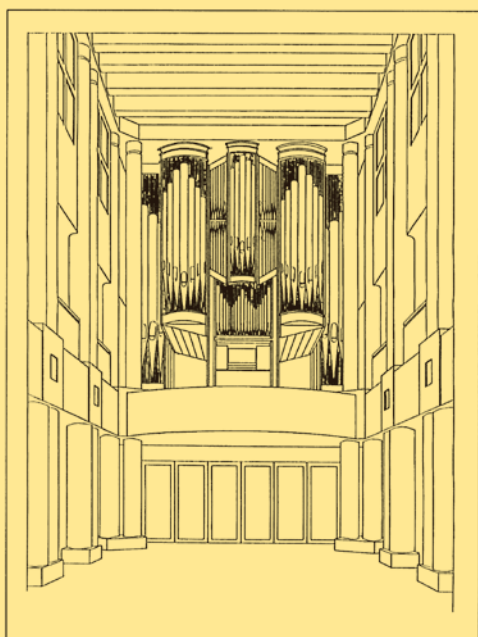
かなでる

- 19 水戸芸術館のパイプオルガン～これまでの歩み
- 26 オルガニストの皆さんからのメッセージ
- 34 パイプオルガン・プロムナード・コンサート出演のオルガニスト一覧

ひろがる

- 40 広がりゆくオルガンの輪～市民のためのオルガン講座
- 42 室住素子(オルガニスト) エッセイ「オルガンを生かす、愛好者の人垣」
- 44 子どもたちから愛されるオルガン～幼児のためのオルガン見学会
- 46 浅井美紀(オルガニスト) エッセイ「ひろがりの種蒔き」
- 48 幼児のためのオルガン見学会 これまでの参加者数
- 54 水戸芸術館のパイプオルガンと私～市民の皆さんからのエッセイ集

- 60 おわりに
- 62 水戸芸術館のパイプオルガンについて



オルガン完成予想図

つくる
TSUKURU

インタビュー 松崎譲二 & 中里威 (オルゲルバウマイスター)

Interview Joji Matsuzaki & Takeshi Nakazato

聞き手：高巢真樹、鴻巣俊博 写真：山崎宏之



マナオルゲルバウの皆さん（左から2番目が松崎譲二さん、一番右が中里威さん）

水戸芸術館にある国産最大級のパイプオルガンを制作してくださったのが、オルゲルバウマイスター（オルガン制作の親方〔ドイツの資格取得者〕）の松崎譲二さんと中里威さん。2021年6月、お二人が代表を務めるマナオルゲルバウ（東京都町田市）の工房を訪ねて、ヨーロッパでの修業時代やオルガン制作時について貴重なお話を伺いました。

オルガンを造るという夢を片手に

松崎：私は、工業高校を出て洗剤会社に就職したものの、機械ばかり見るのが嫌でね。中学生の

ときからクラリネットを吹いていて音楽が好きだったから、音楽関係の仕事をしたかったんです。たまたま知り合いが松尾楽器商会で働いていて、私もその営業マンに。そこでオルガンも輸入していました。1969年にカール・リヒターが初来日した時、公演でヴァルカー社製のポジティブオルガンが使われることになり、オルガンビルダーの望月廣幸さんによる組み立てに私も携わったんです。その後もオルガン制作に関わるうちに、営業より面白そうだと思い、先代の社長に相談したら、オルガン輸入元のボッシュ社社長に手紙を書いてくれたんです。そうすると、「快く受け入れます」という返事が来たので会社を辞めま

した。渡独は1970年。横浜の大栈橋から船でナホトカに行き、列車でハバロフスクへ。さらに飛行機でモスクワに飛び、そこから車でドイツに行きました。海外旅行する人なんてほとんどいなかった時代に片道切符でね。2年後、NHKホールのオルガン設置のために一度帰国し、その後ドイツに戻って、1974年にオルガン職人資格を取りました。

ルクセンブルクとドイツでの職人生活

松崎：休みのたびにヨーロッパ各地のオルガンを見て歩くうちに、アルザス風オルガンに憧れて、就職するならルクセンブルクの工房だと決めました。ルクセンブルクにはベルギーやフランス由来のオルガン文化があるのです。それで1974年に妻と移住し、楽器の修復や制作に携わりました。5年住んだうち、78年に半年間、ドイツのオルゲルバウマイスターの学校に通い、資格を取得しました。それから北ドイツへ。北ドイツにも独特のオルガン文化があり、シュニッター・オルガンみたいに、ブクステフーデの音楽



松崎譲二さん



1978年 ルクセンブルクの工房にて（松崎譲二さん提供）

でよく使われるきりつとした音色に憧れたんです。それに整音が好きだったので、ハンブルクの北、キールにあるパーシェン社に入社。そこで3年働いて、1982年に帰国しました。

80年代半ばの日本というと、地方にコンサートホールがどんどん造られ、自治体が競うように大きなオルガンを設置した時期。囑託として再入社した松尾楽器にも、武蔵野市民文化会館、福島市音楽堂などで同時にオルガンを組み立てるくらい沢山仕事がありました。

マナオルゲルバウの原点

松崎：そうするうちに、旧東京音楽学校（現・東京藝術大学）奏楽堂が老朽化で移設される計画が持ち上がりました。内部のオルガンにも歴史的価値があるから修復することになり、その仕事を依頼されたんです。でも一人でできる仕事ではなかったので、1982年夏に帰国していた中里と、1985年にマナオルゲルバウという会社を設立しました。この2年がかりの旧東京

音楽学校奏楽堂オルガン修復が、マナオルゲルバウの原点です。この仕事を通じてつながりができ、大阪の北浜カトリック教会や桜美林学園からオルガン制作の依頼をいただいたのです。

建築家・磯崎新からの抜擢

松崎：水戸芸術館から依頼を頂いたときは、とても驚きました。水戸芸術館の建物を設計した磯崎新先生が、「私も若い頃は仕事が全然なくて苦労した。日本人でオルガンを造っている人がいるなら、任せてみてもいいんじゃないか」と提案してくださったそうです。同じくオルガン選定委員の一人で、日本人として初めて建築音響設計事務所を立ち上げた永田穂先生も僕らを応援してくださった。とても光栄でしたし、一世一代の仕事だと思って引き受けました。

画家の兄とのヨーロッパ旅行

中里：私は中学からコーラスをやっていました。中高は桜美林学園で、大学は玉川大。卒業後は玉川学園中学部で数学の教師をしていたので、町田から一歩も出ない人生でした。画家の兄（中里^{ひとし}氏）は、アメリカから一時帰国して多摩美術大学の講師をしていたのですが、ニューヨークに戻る時、「おまえは町田しか知らないな。ヨーロッパに行くから一緒に来い」と言われたんです。教師生活1年目の夏休みに。それで、船で3泊4日かけてナホトカに行き、シベリア鉄道でハバロフスクへ。それから飛行機でモスクワへ行き、シヨパン号でワルシャワ、プラハ、ウィーンをまわり、南下してイタリア、そしてスイス、ドイ

ツ、フランスを巡りました。そのときにオルガンの素晴らしさを知りました。

教師生活2年目には生徒たちとピアノ制作をしたんです。そこで楽器作りの面白さに目覚め、自然にオルガンがひらめきました。玉川大のオルガン科教授（富永哲郎氏）に相談したら、彼はオルガンビルダーの辻宏さんとほぼ同期。ぜひやってみよう励ましてくださいました。辻さんからは「オルガン造りは木工が基礎。日本の優れた木工を勉強していくといい」と言われました。それで学校をやめて木工所の見習いになりました。

妻は当時、オルガンを習っていたので、クロダトーンという会社中古の楽器があるか聞きに行ったんです。そこでオルガン造りに興味があると話したら、「札幌でオルガンを組み立てるから見に来ないか」と誘ってくださった。そこでペーター・パウル・ケーベレというオルゲルバウマイスターに出会い、「いつ来てもいいですよ」という手紙をいただきました。



中里威さん

ドイツでの修業

中里：渡独は1975年。シュヴェービッシュ・グミュントという田舎町にあるケーペレ社で丁稚奉公しながら、職業訓練校でドイツ語を覚えました。渡独から2年8か月後にはオルガン職人資格を取得しました。その試験会場はマイスターの学校で、松崎も通っていたので、そこで彼と初めて会いました。その後ルードヴィヒスブルクのマイスター学校へ。そこで隣に座っていたハンス・ウルリッヒ・エルプスレーが、ハンブルクのベッケラート社の人。彼の誘いで会社見学に行ったら、社長が契約書を用意していました。ちなみに息子は1977年、娘が1980年に生まれたので、彼らはmade in Germanyです（笑）。

1980年にハンブルクに移住し、いろんな組み立てを担当しました。そのときに国立音大から注文をいただいたので、1982年に帰国し、組み立てや整音をやりました。そんな中、松崎と中里の頭文字をとって「マナ」オルゲルパウを設立したのです。2人の下の名前は威と譲二。ビートたけしや所ジョージが売れ始めたときだったから、たけし&ジョージという社名も考えました（笑）。当時、ベッケラート社のオルガンが松本市音楽文化ホールにも入ることになり、旧東京音楽学校奏楽堂や松本で仕事しているうちに会社が育ちました。

実は磯崎新さんが1988年に武蔵丘陵倶楽部というゴルフ場のクラブハウスを造ったとき、うちの兄が壁画を頼まれたんです。そのときに弟がオルガン制作者であることを話されて、それで磯崎さんが僕たちにオルガン制作



ルードヴィヒスブルクのマイスター学校にて（左から4人目が中里威さん）

を任せたいと考えてくださったようです。水戸市長だった佐川一信さんも、信頼してくださいました。

ほこりと雨と騒音の中で

中里：水戸では、建物が出来上がってからオルガンを入れることになっていたのですが、建築が遅れに遅れて。オルガン組み立て中に、エントランスをトラックが走っているような状況でした。雨が降ると、屋根のつなぎ目から滝のように雨水が漏れてくるから、雨の後は床の水はけから。水戸のオルガンは大きくて工房で仮組みできなかったから、現場で初めて組み立てたんです。ほこりと雨と騒音の中でね。整音のときもそこら中で工事していましたね。

松崎：整音作業は、外国人のオルガンビルダーなら「整音するときは人を入れるな、人がいるなら俺たち帰る」と言うくらい繊細な仕事です。



1989年、水戸芸術館で組み立て中のオルガン

それなのにスタッフが見学者を案内したりして一日中近くでしゃべっている（苦笑）。静寂がなくて苦労しました。制作は半年間、泊まり込みで作業しました。

中里：吉田光男さん(水戸市芸術振興財団副理事長)の会社の古い家を使わせていただいたんです。でも下見のときは電気が通っていたのに、いざ行ったら電気が切れていて、夜到着したら真っ暗。隣のガソリンスタンドから電気をもらったのが初日の思い出です。でもあの家を使わせてもらって助かりました。

水戸のオルガン制作で心がけたこと

中里：エントランスの丸い柱をイメージしながら、伸びていく感じのデザインを考えました。ケースの材質は磯崎さんの指定でホワイトオーク。色もほんのり白みをかけて塗装しました。磯崎さんは、ヨーロツパの教会のように左右対称に柱を建てていたんですが、僕は「オルガンの一番近くの柱は取り除いてほしい」と言っただけなんです。両脇のペダルのパイプが隠れてしまいますから。でも構造上の理由から認められませんでしたけど。今から思うと、よく設計し

たなと思います。当時、図面は全て手書き。オルガンを設計するときは、その空間をみて、何かモチーフがあるかを見て考えます。

松崎：基本的には自由にやらせてもらいましたね。水戸のオルガンには、贅沢なパイプをたくさん入れています。私はずっとフランスのオルガンに関わってきたから、フランスの古典もドイツのバロックも弾けるようにパイプの種類を考えました。あと、この規模の楽器にはもったないくらい、16フィートのプリンシパルというストップ（音栓）を手鍵盤にも足鍵盤にも入れました。普通はお金も手間もかかるから付けない。でも私はプリンシパルが好きでね。マナでは、小さな楽器にも8フィートのプリンシパルをよく入れる。そうすることで、いい演奏ができると思うんです。水戸では思い切って奮発しました。

中里：海外のオルガニストが来て演奏すると、必ず楽器を褒めてくださいますよね。

松崎：マリー＝クレール・アランとかね。ジャン・ギューは、「マナのオルガンをフランスに輸出する気はあるか？」と。コンサートをやるのに最高だと言ってくださいました。どういう音色を組み込むかも、オルガンビルダーの腕の見せ所。パイプの選び方や設計、太さや形を考えて、どう整音するかが大事です。オルガンを知り尽くしている演奏者なら、1時間弾けば楽器の特徴を見極めて、面白い組み合わせで音色を選びます。私がこう使ってほしいと思ったようなことをどんどんやってくれたりすると嬉

しいです。

楽器は使ってこそ価値がある

松崎：マナオルゲルバウが造ったオルガンは全部で65台ありますが、一番大きいのが水戸のオルガン。こんな規模のオルガンを造れて本当に幸せでした。それに水戸ではよく使ってくれていますね。プロムナード・コンサートは開館以来、定期的にやっているし、音楽大学のオルガン科の学生もここでは一晩中弾き放題。「幼児のためのオルガン見学会」もすごくいい。「市民のためのオルガン講座」も、もつとやってもいいと思うくらい。子供でもさわれるのがいいよね。室住素子さん（水戸芸術館音楽部門元主任学芸員）が昔、「子供に触らせたんだけど、壊れたらどうしましょう」と聞いてきたけど、壊れたら直せばいい。とにかく日本で一番使われている楽器じゃないかな。



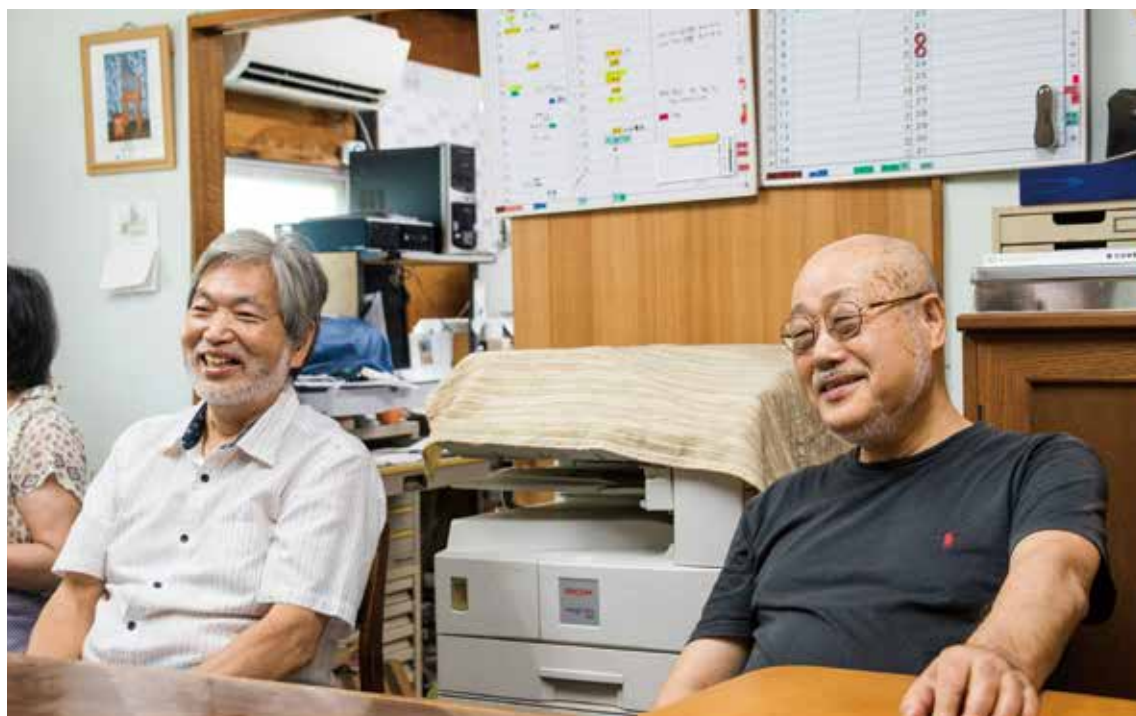
1995年、幼児のためのオルガン見学会（講師：室住素子）



東日本大震災直後の様子。



東日本大震災後に約4ヶ月間修復作業が行われた。その様子は一般の方にも公開した。



東日本大震災後の修復作業

中里：東日本大震災のときは、まさか大きなパイプが落下するとは思いませんでした。地震の前に楽器をオーバーホールする計画があったのですが、それをやる前でよかったです。

松崎：オルガンの内部がぐちゃぐちゃになっていたんで、パイプを全部取り出したんです。普通は修理したら使えるけど、あまりにひどくて。パイプを全部棚に並べて修理しました。でもあのオーバーホールを経て、楽器としては、前よりも音が熟したように感じています。

市民に愛されるオルガン

松崎：とても印象に残っているのは、2012年春、修復後に行われたパイプオルガン復活記念コンサート。約1,800人集まったと聞いています。後ろからオルガンのところに行こうとしたら、人がたくさん集まっていて行けないほど、後ろや階段にまで人がいました。だから当然残響は少なかったけど、浅井美紀さんもしっかり弾いてくれたし、「このオルガンは市民に愛されてるな」とすごく思いました。あんなオルガンは他にないんじゃないかな。

2021年6月15日
マナオルゲルバウ工房にて

マナオルゲルバウ工房探検!

こちらの工房では、パイプオルガンの設計をはじめ、数多くの部品を作るための木材の加工、パイプを実際に鳴らしての整音作業などが行われています。パイプオルガンはとても繊細な匠の技が積み重ねられて生み出されています。









パイプオルガン復活記念コンサート(2012年)

かなでる

KANADERU



水戸芸術館のパイプオルガン ～これまでの歩み

年	日	内 容		
1990年	3/21	水戸芸術館開館記念式典 オルガン:小林英之 トランペット:田宮堅二		
	3/26	松居直美 オルガン・リサイタル		
	6/15	第1回 パイプオルガン・プロムナード・コンサート (演奏:吉田恵) ※以降、現在に至るまで毎月開催		
	8/26・27	井上圭子 ファミリー・コンサート		
	9/10・11	エドガー・クラブ オルガン・リサイタル		
1991年	5/20	ヨアヒム・ドルフミューラー オルガン演奏会		
	8/19	現代音楽を楽しもうⅣ オルガンー今ー 保田紀子		
	9/23	ハネス・ケストナー オルガン・リサイタル		
	12/23	ヴォルフガング・ツェーラー オルガン・リサイタル		
1992年	2/3	ジャン・ギュー オルガン・リサイタル		
	7/13	オルガン・レクチャーコンサート 講師:廣野嗣雄		
	9/17	ジリアン・ウィーア オルガン・リサイタル		
	12/26	鈴木雅明 オルガン・リサイタル		
1993年	4/5	小糸恵 オルガン・リサイタル		市民のための オルガン講座
	12/7	クルト・ラブフ オルガン・リサイタル		
	12/20	【友の会事業】オルガン・レクチャーコンサートⅠ パイプオルガンこぼれ話 講師:室住素子		
1994年	3/15	オルガン・レクチャーコンサート2 フランスのオルガン音楽をたずねて 講師:ブライアン・アシュレー		

年	日	内 容		
1994年	11/21	ホーカン・ハーデンベルガー(トランペット)&サイモン・プレストン(オルガン)		市民のためのオルガン講座
	12/19	【友の会事業】オルガン・レクチャーコンサートⅡ トッカータとフーガ解体新書 講師:室住素子		
1995年	2/13	トン・コープマン オルガン・リサイタル		
	10/23	カルロ・カーリー オルガン・リサイタル		
	12/16	【友の会事業】オルガン・レクチャーコンサートⅢ コラルの料理法 講師:室住素子		
	12/23	パイプオルガン・プロムナード・コンサート500回記念 「市民のためのオルガン講座」修了生12人による マラソンコンサート		
1996年	8/25	ワークショップ パイプオルガンのパイプを作ろう 講師:松崎譲二(オルゲルバウマイスター)		
1997年	3/7	【友の会事業】オルガン・レクチャーコンサートⅣ 歴史の中の逆転〜バツハ親子物語 講師:室住素子	幼児のためのオルガン見学会	
	3/17	ジグモンド・サットマリー オルガン・リサイタル		
	12/15	武久源造 オルガン・リサイタル		
1998年	3/7	【友の会事業】オルガン・レクチャーコンサートⅤ ブラームスの遺言の謎〜11のコラル前奏曲 講師:室住素子、松崎譲二(オルガンビルダー)		
1999年	3/21	【友の会事業】オルガン・レクチャーコンサートⅥ オルガンとオーケストラのえっ!?も言われぬ関係 講師:室住素子		
	9/27	三浦はつみ オルガン・リサイタル		
2000年	2/27	【友の会事業】オルガン・レクチャーコンサートⅦ セザール・フランクの肖像 講師:室住素子		
	10/23	ウェイン・マーシャル/オーレ・エドワルド・アントセン オルガン&トランペット リサイタル		

年	日	内 容		
2001年	3/19	【友の会事業】オルガン・レクチャーコンサートⅧ 言葉なき歌～メンデルスゾーンの音楽 講師:室住素子		
	5/31	リナルド・アレツサンドリーニ オルガン・リサイタル		
	9/10	【友の会事業】オルガン・レクチャーコンサートⅨ モーツァルトとベートーヴェン ～機械じかけのオルガン音楽 講師:室住素子		
2002年	10/28	マリー＝クレール・アラン オルガン・リサイタル		
2003年	3/8	現代音楽を楽しもうⅩⅥ 清水靖晃(サクソフォン) オルガン:鈴木隆太		
	8/25	【友の会事業】オルガン・レクチャーコンサートⅩ オルガンで聴くピーターと狼 講師:室住素子		
	9/29	早島万紀子 オルガン・リサイタル		
2005年	2/21	武久源造 オルガン・リサイタル		
2006年	3/20	ヴォルフガング・ツェーラー オルガン・リサイタル		
2007年	2/26	ジグモンド・サットマリー オルガン・リサイタル		
	8/27	親子のためのパイプオルガン見学会 演奏:浅井美紀		
2008年	3/10	椎名雄一郎 オルガン・リサイタル		
2009年	3/30	パイプオルガン“名器・名曲”探訪の旅 演奏:浅井美紀		
	10/26	ちょっとお昼にクラシック EXTRA2 オルガニスト・グループ『TRM』の“踊るオルガン”!! 演奏:近藤 岳、山口綾規、勝山雅世		
2010年	8/22	夏の夜のオルガン探検 講師:浅井美紀		
	10/7	親子のための「体感! パイプオルガン」 講師:浅井美紀		
2011年	3月11日 東日本大震災発生。オルガンも被害を受け、約4ヶ月修復作業が行われた。			

幼児のためのオルガン見学会

年	日	内 容		
2012年	4/1	パイプオルガン復活記念コンサート 演奏:浅井美紀 プレトーク:松崎譲二(オルゲルバウマイスター)		
	4/28	パイプオルガン・プロムナード・コンサート 再開記念スペシャル オルガン:椎名雄一郎		
	4/30	パイプオルガン・プロムナード・コンサート 再開記念スペシャル オルガン:室住素子		
	5/3	パイプオルガン・プロムナード・コンサート 再開記念スペシャル オルガン:高橋博子 フルート:神田勇哉		
	8/18	「こども・こらぼ・らほ2012」 こどものためのパイプオルガン体験 講師:山口綾規		
	9/28	ピエール・ダミアノー・ペレッティ オルガン・リサイタル	幼児のためのオルガン見学会	
2013年	8/11	「こども・こらぼ・らほ2013」 こどものためのパイプオルガン体験 講師:山口綾規		
2014年	8/9	「こども・こらぼ・らほ 2014」 こどものためのパイプオルガン体験 講師:山口綾規		
	10/24	ミシェル・ブヴァール オルガン・リサイタル		
2015年	7/20	ちょっとお昼にクラシック 室住素子のオルガン・ファンタジー		市民のためのオルガン講座
	8/23	「こども・こらぼ・らほ2015」 パイプオルガン体験ツアー 講師:浅井美紀		
	9/28	森亮子 オルガン・リサイタル イギリス音楽をめぐる 冒険― (茨城の演奏家による演奏会企画)		
2016年	2/3	ロレンツォ・ギエルミ オルガン・リサイタル		
	6/27	トン・コープマン オルガン・リサイタル		
2017年	1/28	スガダイロー・プロジェクトvol.2「秘境／魔境」 ピアノ:スガダイロー オルガン:近藤岳 エレクトロニクス:有馬純寿 ダンス:田中泷		

年	日	内 容		
2017年	7/23	オリヴィエ・ラトリー オルガン・リサイタル		
	9/24	中田恵子 オルガン・リサイタル ～音の展覧会～ (茨城の演奏家による演奏会企画)		
2018年	3/23・24	0歳からのわくわくオルガン★コンサート 演奏:浅井美紀 ※ポジティブオルガンを使用		
	9/10	イエルーン・ベルワルツ(トランペット)&クリスチャン・シュミット(オルガン)デュオ・リサイタル		
	11/9・10	0歳からのわくわくオルガン★コンサート 演奏:浅井美紀 ※ポジティブオルガンを使用		
2019年	8/9	ルドルフ・ルッツ オルガン・リサイタル		
	10/13	0歳からのわくわくオルガンコンサート カラフル☆オルガン オルガン:浅井美紀 合唱指揮:原田昌江 NHK水戸児童合唱団		
2020年	8/21・22	Organ Odyssey～パイプオルガンとプロジェクション マッピングの華麗な共演～ オルガン:石丸由佳 プロジェクションマッピング:イシイキヨコ		
	10/16・17	オルガン・レクチャーコンサート Vol.1 「オルガン潜入捜査」 講師:室住素子、松崎譲二(オルゲルバウマイスター)	新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止	
2021年	3/7	オルガン・レクチャーコンサート Vol.2 「廣江教授の謎解きファイル『タイトルの秘密』」 講師:廣江理枝		
	10/3	オルガン・レクチャーコンサート Vol.3 「バッハへの道～J.S.バッハに影響を与えた10人～」 講師:椎名雄一郎		
	11/3	小さな聴き手のためのコンサート「たいようオルガン」 (水戸芸術館委嘱作品・世界初演) オルガン:石丸由佳 ソプラノ:小林沙羅 作曲:野村誠 (原作:荒井良二『たいようオルガン』[偕成社])		

市民のためのオルガン講座

■その他のオルガン使用公演

- ・ニューイヤーコンサート ・クリスマス・コンサート、クリスマス・プレゼント・コンサート
- ・「作曲家の肖像」シリーズ ・ちょっとお昼にクラシック ・中学生のための音楽鑑賞会

過去の演奏会から



1995, 2016

トン・コープマン
オルガン・リサイタル
(1995年2月13日、2016年6月27日)



1997

ジグモンド・サットマリー
オルガン・リサイタル
(1997年3月17日)



2002

マリー＝クレール・アラン
オルガン・リサイタル
(2002年10月28日)



2014

ミシェル・ブヴァール
オルガン・リサイタル
(2014年10月24日)



2017

オリヴィエ・ラトリー
オルガン・リサイタル
(2017年7月23日)



2019

ルドルフ・ルッツ
オルガン・リサイタル
(2019年8月9日)

MESSAGE

オルガニストの皆さんからのメッセージ (50音順)



青木早希 Saki Aoki

東京の実家を離れたことのなかった学生の私にとって、水戸でのプロムナードはオルガニストとして、また学生から大人への第一歩という意味でも大事な経験となった。閉館後のリハーサルではオルガンと一対一に向き合い、空間全体を独り占めする喜び、終電も気にせず深夜ホテルまでゆっくりと歩く道々、そんな今では習慣になっている遠方でのコンサートならではのリズムのようなものを初めて味わったのも水戸だろう。エントランスホールという設置場所や、館内全体に広がるモダンでオープンなエスプリが、オルガンの響きに解放感を与え、重厚な和音を鳴らす際に求められる大きな呼吸や力強いエネルギーが、今も鮮明に蘇る。



浅井寛子 Hiroko Asai

2000年、藝大大学院に入学した私はたびたびプロムナード・コンサートに出演させていただく機会をいただきましたが、当時研究していた19～20世紀ドイツの作品など、実験的なプログラムをいつも快く受け入れてくださいました。一昨年夏18年ぶりに芸術館のオルガンと再会し、その豊かな響きを堪能いたしました。市民の皆様に愛され、以前よりもお客様との距離感が近くなったと感じました。今後一層の発展をお祈り申し上げます。



ブライアン・アシュレー Brian Ashley

私が水戸芸術館で過ごした時間はとても良い思い出として心に残っています。「マナオルゲルバウ」のオルガンは日本の優れたオルガン建造の偉大なる規範です。私は1994年にレクチャーコンサート、1997年にプロムナード・コンサートの600回記念に出演しました。水戸芸術館スタッフのホスピタリティ、特に私の友人室住素子さんの素晴らしいサポートに心から感謝しています。1995年、プロのオルガニストとして私の初めてのCDをここでレコーディングできたことは貴重な人生経験であり、私のキャリアでとても重要な位置を占めます。水戸芸術館は心から大切に思っている場所です。私に様々な機会を与えてくれたことに限りない感謝を込めて。

I have very fond memories of the times I have spent at Art Tower Mito. The Mana organ is a great example of fine Japanese organ building. I performed a lecture concert in 1994 and a promenade concert in 1997 (600th of the promenade series). I really appreciated the hospitality of the Art Tower Mito staff, and especially the wonderful support and assistance of my friend Motoko Murozumi. In 1995, recording my first professional CD there was a valuable life experience and very important for my career. Art Tower Mito is a place that I hold dear in my heart with immense gratitude for the opportunities it gave me.



©Naoko Nagasawa

石丸由佳 Yuka Ishimaru

水戸芸術館のオルガンは一番長いお付き合いになる楽器のひとつです。学生だった私には恐ろしく巨大で練習室とは比べものにならない残響があり、夜中まで夢中で弾いたのを覚えています。演奏会はもちろん、曲の合間にお話をしたり、サンタクロースのコスプレで弾いたり！ 水戸でたくさんの初めての経験をさせて頂き今があります。いつもあたたかいスタッフの皆様、夜中まで私を待っていてくれた守衛さんにも、心より感謝です！



©高山龍也

大木麻理 Mari Ohki

朝までオルガンと戯れる…という経験を初めてさせて頂いたのが、水戸芸術館のオルガンです。まるで世界には自分とオルガンしか無いと錯覚するような、不思議で贅沢な時間でした。ソロやアンサンブルなど様々な経験をさせて頂いた芸術館での音楽体験は、今の私の血となり肉となっています。これからもこの楽器が、市民の皆さまやオルガニストから愛され、素敵に歌い続けていくことを心から願っています！



©Julian Rettig

大平健介 Kensuke Ohira

水戸芸術館の開館と共に産声を上げたパイプオルガンは、コンサートホールでも礼拝堂でもない、エントランスホールの豊かな響きの中、その歌声を伸び伸びと聴かせてくれる。閉館後の夜間に真つ暗闇の中で聴いたオルガン、または翌朝開館前の朝日の中で聴いたオルガンと心に残る思い出は幾つもあるが、特には水戸芸術館のオルガンを受する聴衆に囲まれて聴く音色がやはり格別だ。水戸芸術館のオルガンがこれからも多くの人に愛されていきますように！



甲斐弦也 Genya Kai

私が水戸芸術館のオルガンを初めて演奏したのは、武蔵野音大大学院在学中の2001年のことだった。師匠の藤枝照久先生にレーガー作曲の〈バツハの名による幻想曲とフーガ〉を弾くよう勧められ、同曲を演奏。拍手喝采を浴び、学芸員の中村さんから「甲斐さんのレーガーは素晴らしかった」というお褒めの言葉までいただいた。2002年に渡独してからも、一時帰国中にはよく水戸で演奏させていただいている。



勝山雅世 Masayo Katsuyama

学生時代から大変お世話になっている水戸芸術館。東京から特急での移動、心地よい残響に包まれた夜中の練習、ホテルへの移動は自転車をお借りし、1日に2回ある本番の休憩時間に食べるカフェのお気に入りビーフカレー。そして私と一緒に呼吸してくれるオルガンと、いつも温かく迎えて下さるスタッフの皆様。オルガニストとして未熟な私をじっと見守って下さいました。これからも末永く愛される空間でありますように。感謝の気持ちを込めて。



小林英之 Hideyuki Kobayashi

今からおよそ30年前、1990年前後はコンサートホールへのオルガン設置ブームで、オルガニストにとって夢のような時代でした。水戸芸術館ではホール内ではなく、エントランスへの設置でしたが、響きも良く、かしこまった演奏会より、お客さんが親近感を感じるのではと期待しました。開館式典、NHK-FM収録での演奏はじめ、水戸室内管弦楽団第26回定期演奏会〈ナクソス島のアリアドネ〉のハーモニウムを担当したことが特に印象に残っています。今後もオルガンが大切に使い続けられるよう願っています。



©青柳聡

近藤 岳 Takeshi Kondo

20数年前、大学院の頃に初めて出演したプロムナード・コンサート。ただただ若いエネルギーと情熱を頼りにオルガンを弾いていたような若造でしたが、その良い所をいち早く見出してくださったのは水戸芸術館の皆さまでした。月日は流れ、その後水戸に伺ってコンソールに向かう時はいつも、「オルガンを選びとったあの頃の自分」に出会うような気持ちになります。きっと僕がいくつになっても初心に戻れる場所…それが水戸芸術館です。



椎名雄一郎 Yuichiro Shiina

オルガン設置30年余りおめでとうございます。大学時代の思い出にプロムナード・コンサートが挙げられます。前日夜から朝まで、好きなだけオルガンが弾ける環境で、若かりし頃朝まで練習したことが思い出されます。日本で貴重な豊かな響きの空間と3段鍵盤の楽器は、当時の私にとって楽しいひと時でした。そして学芸員の方々の音楽、演奏に関するアドバイスに今でも感謝です。今後も若いオルガニストの育成にどうぞお力をお貸しください。



©Marco Borggreve

鈴木優人 Masato Suzuki

水戸芸術館のオルガンとの初めての思い出は、小学生の頃、父のリサイタルで緊張しながらアシスタントを務めたことでした。藝大に入ると、オルガンを専攻する学生にとって素晴らしい機会であるプロムナード・コンサートでお世話になりました。あたりが真っ暗な中、レジストレーションをしていたのが懐かしいです。建造から30年以上経ったとのこと、本当におめでとうございます！これからも素敵な音楽をみんなに届けてください！



高橋博子 Hiroko Takahashi

水戸芸術館…この名前を拝見するだけで温かい気持ちになれるほど、私にとって特別な場所です。水戸芸オルガン史に度々登場させていただき光栄です。一番印象に残っているのは2012年の〈シュニトケの肖像〉でしょうか。ひょっとしたらハンプルク留学時代に街中でご本人とすれ違っていたかもしれないシュニトケのオルガン作品と初めて引き合わせてもらいました。中村晃学芸員の先鋭的な企画。こんな自由な水戸芸術館が大好きです！



徳岡めぐみ Megumi Tokuoka

本来パイプオルガンは長い残響時間が求められる楽器です。学生当時の大学にはホールのような広い空間に楽器がなかったため、水戸芸術館でのコンサートは自分たちの勉強や経験のためにも貴重な機会でした。私は藝大生の出演スケジュールをまとめる「水戸係」を何年か務め、コンサートの回数が今以上に多かったこともあって慌ただしくも楽しかったことを思い出します。これからの学生達にとっても変わらず成長の場としてありつづけてほしいと心から願っています。



中田恵子 Keiko Nakata

学生時代、プロムナード・コンサートに出させていただき度、心が元気になるのを感じていました。スタッフさん達の笑顔、夜中に一人オルガンと向き合える時間、帰り道の凜とした空気、ホテルで食べる朝食。例えば大学生活で悩むことがあっても、一時忘れてリフレッシュできました。茨城県出身なこともあり、懐かしさもあります。その後も「幼児のためのオルガン見学会」や、リサイタル等でお世話になりました。水戸芸術館は度々帰りたくなる、特別な場所です。



長田真実 Mami Nagata

楽器が佇む地を巡ってオルガニストは旅します。私にとって初めてのオルガン演奏旅行はまさに水戸芸術館でした。「学部3年生から水戸デビュー」という憧れを胸に、初めて水戸芸術館にたどり着いた日。初めて出会うオルガンとの冒険と楽しみで胸いっぱいだったのを今でも鮮明に覚えています。その地の歴史や土地柄、人々の気質に触れ、そこでしか味わえないオルガンの響きを浴びることのできる至福の時。そんな場を作り、水戸で愛される楽器を守り続けてくださっているホールの皆様に改めて心から感謝です。



早島万紀子 Makiko Hayashima

1993年「メシアンの肖像」公演と2003年ソロリサイタルで演奏させていただきました。印象に残っているのは最初の出会いから10年を経たオルガンの音色がよりまろやかになり鍵盤も驚くほど弾きやすくなっていたことです。古典から現代までオールフランス作品でオルガンの多彩で魅惑的な表情を堪能させていただきました。日本初演となったフローレンツの〈ロード〉は特に思い出深いです。オルガンは年月とともに成長するのですね。あれから20年近く経ちました。更に磨かれ妙齢となったオルガンとの再会を夢見て。



©Ayane Shindo

廣江理枝 Rie Hiroe

オルガン設置30年余、おめでとうございます。設置当初から演奏させていただいたことを考えると、自分も同じ年月を重ねたということ。まさに光陰矢の如しです。藝大大学院在学中、「特急ひたち」に乗って、プロムナード・コンサートに足繁く通わせていただきました。夜中のエントランスホールの情景—温度・湿度・香り等の記憶が今でも鮮明に蘇ります。豊かな残響の中で大オルガンを演奏できる無常の喜びをありがとうございました。



廣野嗣雄 Tsuguo Hirono

オルガン見学のため、東京藝術大学の学生たちと訪れたのは、楽器完成後間もなくでした。これをきっかけとして学生たちに週末の演奏機会が与えられて、30年近くの時がすぎました。ここで貴重な体験をつんだ学生たちは、卒業後、国内外で幅広く活躍し、時には自立後も皆さまにその成長ぶりを聴いていただいています。いつも週末になるとオルガン音楽が聴けるとは何と素晴らしいことでしょう！ここでしか味わえない習慣が、50年、100年と続くことを祈念いたします。



ミシェル・ブヴァール Michel Bouvard

親愛なる皆様、

2014年に水戸のオルガンでコンサートで弾かせていただいたことはとても良い思い出です！聴衆の皆さんの温かい雰囲気の中、第2部でフランスの作品を演奏し、オルガンの響きも素晴らしく、とても楽しかったことを覚えています。

また2022年に皆様とお会いできますことを楽しみにしております。

Dear friends,

I have very good memories of my concert in 2014, on the Mito organ! I remember a warm audience, and having a lot of fun playing the French music in the second part, which sounded very good! I send you my best regards, and look forward to seeing you in 2022!



©安井進

福本茉莉 Mari Fukumoto

深夜に練習を終えると自転車走らせてホテルに向かう。人っ子一人いない水戸の街は、タワーの気配も相まってどこか異空間のようだ。展示室から漏れ感じる独特の空気感に、時々エントランスに響く巡回の足音、ストップを換える音さえも何か魔法にかかったようだった。ドイツの凍える教会でそんな年頃の学生をレッスンしていると、ふと当時のことを思い出す。ティーンエイジャーから大人になる、その絶妙な時期こそその世界観は私の中で今、生きている。



梅干野安未 Ami Hoyano

2020年に出演したクリスマス・プレゼント・コンサートでは、エントランスの大オルガンではなくホールにあるポジティブ・オルガンを演奏しました。オルガンのプロムナード・コンサートとはまたひと味違った公演で、地元の方々に愛されている芸術館の魅力を満喫しました。学生時代から何度となく通っている水戸芸術館ですが、まだまだ知らない事ばかり！ 次の30年間も芸術館の未知の音色に出会えることを楽しみにしています。



ダヴィデ・マリアーノ Davide Mariano

私は光栄にも2回水戸芸術館で演奏する機会をいただきました。1度目は札幌コンサートホール専属オルガニストを1年間勤めていた2017年、そして2度目は日本ツアーを行った2019年でした。どちらの回も広いレパートリーに対応するオルガンやとても親切なスタッフ、そして水戸の温かいお客様の皆様のおかげで楽しい経験となりました。芸術とアーティストにとって、なんて素晴らしい場所なのでしょう！

I had the pleasure to play at Art Tower Mito two times: in 2017 during my one-year residency as an organist at the Sapporo Concert Hall, and in 2019 during a tournée in Japan. Both times I enjoyed the versatile organ, the very friendly staff and the warm audience in Mito. What a wonderful place for arts and artists!



三原麻里 Mari Mihara

芸術館閉館後から開始し、時には午前2、3時頃まで及ぶ真夜中の練習は、オルガンと対話し、作品とじっくり向き合い、自分自身とも格闘する、なんとも愉快で、しかし神聖な時間でした。渡仏後、教会での真夜中練習が一つも苦にならなかったのは、水戸で鍛えて頂いたおかげです。美しい音楽を聴き手と共有する喜びを私に教え、オルガニストの道を歩もうとする私の背中を、そっと押してくれたのが水戸芸術館のオルガンでした。



山口綾規 Ryoki Yamaguchi

学生の頃は、コンサート前日に誰もいないエントランスホールで真夜中まで思う存分に練習できたことが嬉しく、朝までずっと弾いていたかったほど。夢のような時間でした。その後も演奏の機会がわりに多く、私にとってはご縁のあるオルガンのひとつです。気軽に足を運んでオルガンを聴くことが街の皆さまに定着しているのはまさに理想的で、長年のコンサート継続の賜物だと思います。ますます愛されるオルガンでありますように。



山田由希子 Yukiko Yamada

初めてプロムナード・コンサートに出演したあの日を鮮明に覚えています。舞台上上がる緊張よりも、豊かな響きの中で大きなオルガンを弾ける嬉しさに加え、自分に委ねられた音作りが楽しくてワクワクが止まらなかったことを思い出します。調子に乗って夜通しリハーサルをして本番前にすっかり疲れてしまったことも淡い思い出です。それから20年以上が経ちましたが芸術館の楽器を前にした時のワクワク感は今でもずっと続いています。



吉田 恵 Megumi Yoshida

水戸芸術館のパイプオルガン・プロムナード・コンサートが1500回以上を迎えられたとのこと、心よりお祝い申し上げます。私はまだ留学前に、第1回のプロムナード・コンサートに出演させていただいたのですが、響きの良い空間で楽しく演奏させて頂いたのをよく覚えています。前日の夜のリハーサルも、思い切り弾かせて頂き、今思えばとても贅沢な時間を過ごさせて頂きました。これからも、美しく響き続けますようにお祈りしています。



ルドルフ・ルッツ Dr. h.c. Rudolf Lutz

茨城県の水戸芸術館にある格調高いオルガンでコンサートができたことは、とても大切な思い出として残っています。心をひらいてオルガンの多彩な音色に耳を傾けてくださった聴衆の皆さま、美しい音響の会場のことは今でも印象深く覚えています。それに Maki さんをはじめ、スタッフの皆さんのおもてなしも最高でした。終演後に伺った近所の美味しい居酒屋のことも忘れられません。ソリストとして来日すると、日本ではいつも王子のように歓迎していただいています。

I have very fond memories of my organ concert on the magnificent organ of the Art Mito Tower in Ibaraki! An open-hearted audience who listened to the diverse sounds of the organ, an imposing hall complex with beautiful acoustics. In addition, I was cared for and looked after in the best way by Maki san - and crew. Last but not least an unforgettable visit after the concert in an excellent sake restaurant. As it is in Japanese tradition: As a soloist you always feel most welcome and are treated like a prince.

パイプオルガン・プロムナード・コンサートに ご出演いただいたオルガニストの皆様 (50音順)

リオネル・アヴォ、青木早希、青木理津、青谷充子、浅井寛子、浅井美紀、浅尾直子、
ブライアン・アシュレー、阿部 翠、荒井牧子、安 杏菜、井川緋奈、池谷瑞季、伊澤長俊、
石川優歌、石原映子、石原麻衣、石丸由佳、板垣敬子、伊藤順子、伊藤純子、伊藤秀行、
伊藤由美子、井上圭子、井上紗和子、今村玲子、内田光音、江尻弘子、大木麻理、大竹 勲、
太田有紀、大平健介、大森佳織、岡田 章、岡本桃子、岡本有加、荻野由美子、尾崎麻衣子、
尾関夢子、小野なおみ、小野田未奈、小野田良子、甲斐弦也、春日朋子、勝山雅世、
加藤慶子、加藤麻衣子、金子雄太、川越聡子、木下啓香、木村理佐、チャールズ・ロイ・キャンベル、
清沢紀久、久野将健、久保田真矢、栗田麻子、栗山美緒、マルタン・グレゴリウス、
黒田弘美、小糸 恵、河野正行、古賀智子、小島弥寧子、後藤美幸、パヴェル・コホウト、
小松真由美、近藤 岳、紺野麻衣、齋藤麻衣、齋藤 恵、坂戸真美、鷺 晶子、佐々木美季、
佐藤初音、ダニエル・ザレツキー、椎名雄一郎、ハイデ・シェク、渋澤久美、清水奏花、
パク・ジュンホ、城島佑生子、ジョン・ウォルトハウゼン、鈴木優人、関 日向花、関本恵美子、
高田富美、高橋博子、滝 順子、竹口苗里、武久源造、龍田優美子、谷島純子、田宮 亮、
千田寧子、都築由理江、照沼真美、東方理紗、土岐幸子、徳岡めぐみ、徳田佑子、富田真希、
豊田まりも、鳥居亜佑子、長井浩美、中内潔、中川紫音、中澤未帆、永瀬真紀、長瀬玲子、
中田恵子、仲谷沙弥香、長田真実、中野田友子、中野ひかり、中原万紀子、中丸まどか、
永見亜矢子、中村岩城、中村直美、長山 結、新垣玲子、新妻由加、新山恵理、西 優樹、
西岡 崇、西田裕子、二宮まゆ、野田亜希、野田美香、野田優子、長谷川美保、花澤絢子、
英 貴子、早田平八朗、原田真侑、原田靖子、アントニウス・ビットマン、平中弓弦、廣江理枝、
宮坂 幸、福富由加里、福本茉莉、舟喜光子、梅干野安未、堀江妙子、堀切麻里子、
ドゥニ・ボルダージュ、本田ひまわり、榎 安里、町田慶太、松井莉紗、ダヴィデ・マリアーノ、
パスカル・マルソー、三上郁代、水木順子、三巻明子、三輪基子、湊 彩花、湊 恵子、
三原麻里、村上葉子、室住素子、ジャン＝フィリップ・メルカールト、森 淳子、森永ナディア真莉子、
森 亮子、安井 歩、柳澤文子、山口真理子、山口綾規、山司恵莉子、山田由希子、吉田 愛、
吉田 恵、吉村怜子、米沢陽子、米山浩子

計177名(2022年1月現在)







ORGAN ODYSSEY～パイプオルガンとプロジェクションマッピングの華麗な共演～(2020年)



小さな聴き手のためのコンサート たいようオルガン(2021)



ひろがる
HIROGARU

広がりゆくオルガンの輪 ～市民のためのオルガン講座

パイプオルガンを活用した教育普及プログラムを2つご紹介します。まずは当館音楽部門の元主任学芸員で、現在はオルガニストとして活躍している室住素子さんが講師を務める「市民のためのオルガン講座」。半年間じっくり学べる「実技レッスンコース」(初級・中級)と、気軽に一時間体験できる「一回体験コース」があり、毎年人気の講座です。

実技レッスン



初級コースでは受講生のレベルにあわせて、きめ細かな個人レッスンが行われます。中級コースは、初級を修了し、さらに学びを深めたい方向けで、より難易度の高いオルガン曲を学ぶことができます。



一回体験

一回体験コースは、参加者の興味関心にあわせて自由な内容でおこなっています。楽器内部を見学したり、好きな曲を弾いてみたり、ときには他の楽器との合奏に挑戦される方も！



レッスンの前には、コンサートホールにあるポジティブオルガン（シュツケ社製）で自主練習を行うこともできます。



室住素子さんによる温かい司会進行が、発表会を彩ります。

発表会を終えて、ほっとした表情の皆さん。
お疲れ様でした♪ (2020年3月)

発表会



半年間のレッスンを経て、いよいよ3月には発表会！
お客様の前で、学びの成果を思いきり披露します。



オルガンを生かす、愛好者の人垣

室住 素子

2020年春、予定されていた開館30周年のお祝いのコンサートは、コロナのためにすべて中止となり、芸術館は静まりかえっていました。

その静寂を打ち破ったのは、開放的なエントランスホールに設置されたオルガンでした。こんな強さを持っていたのか、と私は驚いてしまいました。

と言うのも30年前、完成したばかりの春には、新聞に「下水道も完備しない町にパイプオルガンが必要か？どうせ弾かれもしないのに」という批判の投書が載りました。また、「なんですか、あの酷い音は？狂っている」という怒りの電話を受けた事もありました。オルガンは3度上や5度上を倍音として出す事がありますが、それを狂った音と感じられたようでした。その違和感を、どう理解へ繋げられるか。当時オルガン科を出たてで学芸員になっていた私は、考え始めました。楽器を大事にするには、故障を恐れて人を遠ざけてはならない、逆に近づいていただき、オルガンの周りに愛好家たちの人垣を作れば良い、と思っていました。

まず1990年6月には、藝大生の協力を得て、週末のプロムナードコンサートが始まりました。土曜日2回、日曜日は3回、入場無料。それを毎週続けました。

また、93年には「市民のためのオルガン講座」を始めました。1期生の募集には71人の応募があり、選ばれた5人が2ヶ月のレッスンを受け、プロムナードで発表しました。これを3期続け、その修了生12人が95年12月のプロムナード500回記念に出演し、市民も立派に弾ける事を証明してくれました。

また、広場に幼稚園児さんが遊びに来ているのを見かけ、引率の先生に「パイプオルガンで遊んでいきませんか？」とお誘いした事も。オルガン伴奏で童謡を歌ったり、私がトトロの「さんぽ」を弾いたり。96年には愛恩幼稚園の皆さんが、初めて演奏台に入りオルガンを弾きました。これが園児の見学会の始まりです。

他に、友の会主催のオルガンレクチャーコンサート(93年～2003年、全10回)やワークショップ「オルガンのパイプを作ろう」(96年)など、とにかく思いつく限りの事をしました。

その後、私は学芸員を辞し、オルガニストとして各地で弾くようになりました。その結果、気づいたのは、4秒近い残響を体験出来るホールは他には無い事、演奏を支えるアシスタントを出してくれるホールも無い、という事でした。水戸芸術館は希有な存在なのでした。

2013年から「市民のためのオルガン講座」が再開され、私も講師をしています。実技コース初級で12回のレッスンを受けた後、さらに続けた人も増え、中級も作られました。また、一回体験コースでは、弾ける人もそうでない人も、楽しめるプログラムをその場で作るので、1時間が輝くように過ぎていきます。3月の発表会を聴きに来た人が弾きたくなるケースも多く、人の輪が広がっていき、それを担当学芸員や芸術監督がしっかり支えて下さいます。

開館後30年以上が過ぎ、ふと気づくと、プロムナードで弾いていた藝大生達が立派なオルガニストになり、廣江理枝・藝大教授や椎名雄一郎・活水大教授が、レクチャーコンサートでお話や演奏を聴かせてくれています。また、幼稚園

時代に楽しく弾いた思い出を持つ人が社会人になり、オルガンを弾きに來ます。

今までオルガンを通して関わった人々の多くが、関心を持ち続けてくださり、オルガンコンサートの折には聴きにきてくれています。

オルガンを幾重にも囲む愛好者の人垣、出来たと思います。気づけば私もその中の1人。未来にわたり、益々オルガンが愛されますよう、心より祈っております。

(この原稿をまとめるにあたり、オルガン講座1期生の梅津直子さん、2期生の秋葉緑さんが当時の資料をお寄せくださいました。感謝)



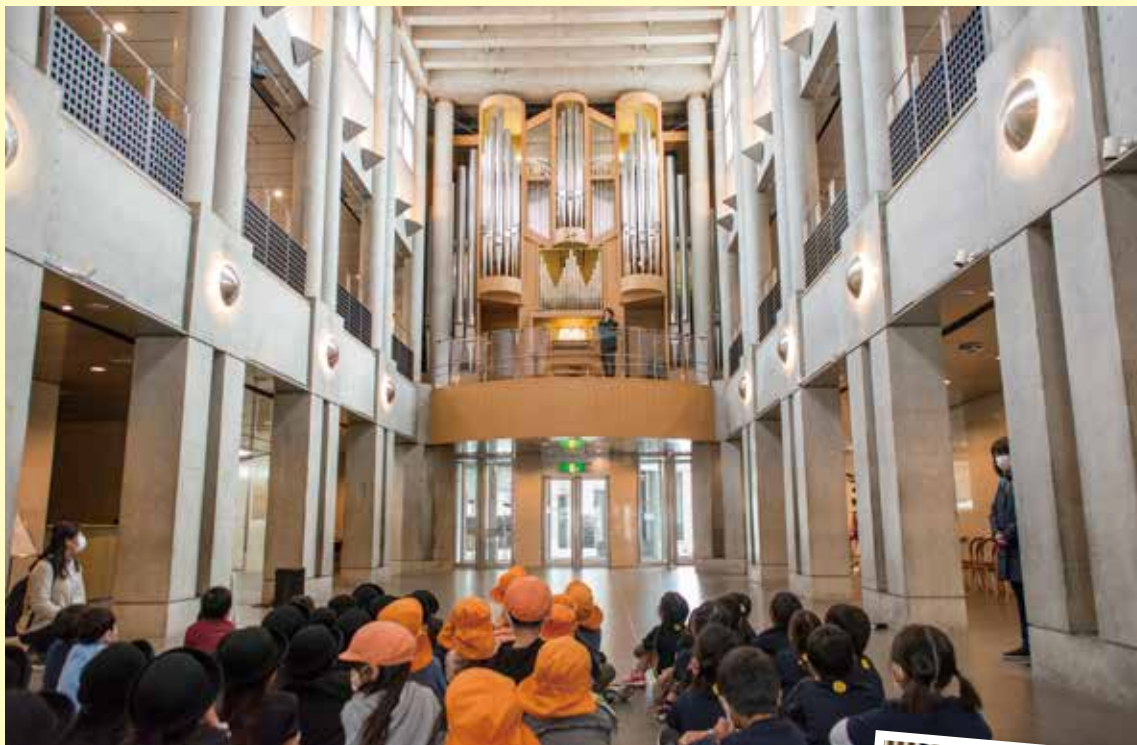
室住素子 Motoko Murozumi

東京大学文学部美学芸術学科を経て、東京藝術大学音楽学部器楽科(オルガン専攻)卒業、同大学院修士課程修了。安宅賞受賞。水戸芸術館開設準備室に入り、1997年まで音楽部門主任学芸員を務めた。1993年には「市民のためのオルガン講座第1期」に対して、吉田秀和・水戸芸術館館長賞受賞。その後オルガニストとして、新日本フィルハーモニー交響楽団、東京都交響楽団、NHK交響楽団、サイトウ・キネン・オーケストラなどと共演を重ねている。2010年カーネギーホールにて、小澤征爾の指揮でプリテン〈戦争レクイエム〉のオルガンを担当した。

子どもたちから愛されるオルガン ～幼児のためのパイプオルガン見学会

「幼児のためのパイプオルガン見学会」は、水戸市内の保育園・幼稚園年長の子どもたちを休館日に招いて開催しています。1996年、当時音楽部門主任学芸員だった室住素子さんが始めたこの見学会。2003年からはオルガニストの浅井美紀さんが講師を務めています。クイズや体験コーナーを交えた見学会を通して、子どもたちにオルガンの仕組みや音楽の楽しさを伝えています。

オルガンの音を聴いてみよう！



エントランスホールに集まった子どもたちは、まずオルガンの演奏を聴きます。初めて聴くオルガンの音に驚いたり、お友達と顔を見合わせたりと反応はさまざま。その後、オルガンの音が出る仕組みのお話を聞き、「パイプは何本あるでしょう」クイズで盛り上がります！





パイプを吹いてみよう！

オルガンは空気の力で音が出ることを聞いた子どもたち。次は実際に自分の息でパイプの音を出してみます。パイプの長さや太さ、材質によっていろいろな音が出ることがよく分かりますね。

※パイプはその都度消毒しています。なお、現在この体験は行っておりません。



オルガンを弾いてみよう！

いよいよ大きなオルガンを弾いてみます。演奏台で見てみると鍵盤の色がピアノと違ったり、たくさんのボタンやストップが付いていたり、遠くから見ると分からなかったこともありますね。



オルガンと一緒に歌おう！

最後は、一緒に楽しい時間を過ごしたオルガンの伴奏で歌います。この時歌ったのは映画「となりのトトロ」の〈さんぽ〉。オルガンの音に負けないように大きな声で歌って見学会を締めくくります！



ESSAY

ひろがりの種蒔き

浅井 美紀

高校一年生の時、私は「外国語のスペシャリストになる」という夢を密かに抱いていました。「何か一つの言語に堪能になって、その地域の言葉のスペシャリストを目指そう!そして言語や文化の研究を通して、その地域と日本との橋渡しができるような存在になろう!」と、15歳の私は考えていたのです。

しかし、時を同じくしてパイプオルガンという楽器に出会い、まさに一目惚れといった形で一気にのめり込んでしまった私は、音楽の道を選びました。その時の想いは、それまで抱いていた夢と、なんとなく似ているものでした。「オルガンのスペシャリストを目指そう!そしてアンサンブルで活躍したり、みんなにその魅力を伝えたりすることができるような存在になろう!」と、決意したのです。

パイプオルガンという楽器を選んだことにより、私の社会経験は大きくひろがることとなりました。コンサートホールや学校での企画に数多く携わることができ、オルガンを通して、「音楽とは?」「演奏とは?」「感動とは?」などについて考える、様々な機会を体験することができました。

さあ、次はオルガンの魅力がみんなにひろがるのを、私が助ける番です。

大学院修了の春にお声かけいただいた「幼児のためのパイプオルガン見学会」のお仕事。意気揚々とスタートしてみたものの、最初の数年間は試行錯誤の連続でした。そのような中で、芸

術館スタッフの方々はいつも温かいアドバイスを下さり、私の意見やイメージをいつも大切にして下さり、現在の見学会の形が少しずつ出来上がってきました。見学会スタッフ、参加施設の先生方、そして子どもたち。みんなで創り上げていくこの見学会は、これからも進化を遂げてゆくと 생각합니다。

「オルガン見学会って、種蒔きみたい。」

今回の執筆依頼をいただいたその日、頭に浮かんだ一言です。

大好きな先生やお友だちと一緒に、園からオルガンに会いに来る子どもたち。エントランスホールという素晴らしい空間で、立派な楽器とともに歌えば、たちまち元気な歌声に包まれる…。みんなが喜んで帰っていく様子を見つめながら、「私たち見学会スタッフが『感動体験』という種をみんなに蒔くことができたらいいな」と感じるのです。

子どもたちに蒔かれた種は、その後のいろいろな経験を通して、ある日ひょっこりと芽を出すかもしれません。それは学校で音楽を習う瞬間、荘厳な建築や繊細な美術に触れる瞬間、あるいは西洋史に興味を持つ瞬間かもしれません。スポーツの試合での勝利の瞬間かもしれないし、ご馳走を目の前にした瞬間かもしれません。

「うわぁ!! 凄い!!」というような体験をした時、もし、幼き日のオルガン見学会を思い出してくれたなら、それはきっと、「その子のこれからの毎日がより楽しく充実したものになってゆくことを、後押ししてくれるに違いない」と思うのです。

そして、この素敵な見学会を通して、エントランスホールの大オルガンの魅力もまた、みんなの心の中へと深くひろがっていたらいいな、と思っています。

芸術館からひろがるたくさんの美しく豊かな世界があります。私自身も、芸術館に一步足を踏み入れるごとに、毎回世界がひろがってゆく感覚があります。その中のひとかけらである見学会のメンバーに加えていただいて、私は本当に幸せです。

見学会を通して、私の中に蒔かれている数えきれないほどの感動の種は、今日もすくすくと芽を出しています！



浅井美紀 Miki Asai

東京藝術大学音楽学部器楽科オルガン専攻卒業。同大学院音楽研究科修士課程修了。安宅賞およびアカンサス音楽賞受賞。横浜みなとみらいホール・オルガニスト・インターンシップ修了。全国各地における演奏活動のほか、オルガン見学会や公開講座等の企画・演出も数多く手がけている。水戸芸術館では1997年よりパイプオルガン・プロムナード・コンサート、ワークショップ等に数多く出演、2003年より「幼児のためのパイプオルガン見学会」講師を務め、好評を博している。現在、青山学院高等部オルガニスト。

幼児のためのオルガン見学会 これまでの参加者数 (2003年以降)

年	人数
2003年	589人
2004年	600人
2005年	1,173人
2006年	1,491人
2007年	1,503人
2008年	1,577人
2009年	1,828人
2010年	1,292人
2011年	1,056人
2012年	1,313人
2013年	1,429人
2014年	1,230人
2015年	1,224人
2016年	1,340人
2017年	1,443人
2018年	1,599人
2019年	1,311人
合 計	21,998人

(2020年冬以降、2022年1月現在まで新型コロナウイルス感染拡大防止のため開催を見合わせています。)











水戸芸術館の
パイプオルガンと私

市民の皆さんからのエッセイ集

音楽と共に生きる ～水戸芸術館のパイプオルガンとの思い出をめぐって～

仁衡 琢磨

私の人生、いつも音楽が共にあったな。50代となった今、つくづく思う。

高校時代、吹奏楽部で演奏に取り組んでいた私。卒業後は時折室内楽を演奏することを愉しむぐらいで、主には仕事に力を入れた20～30代を過ごし、そのなかで家庭を持った。ようやく余裕ができてきた40代、演奏会に通い音楽をゆったり楽しめるようになった。そこへ起きた大震災。原発事故による二次災害への不安から家族を疎開させ、独りぼっちで暮らした日々。その時期に私を救ってくれたのは週末に見られる家族の笑顔と、そして音楽だった。

その後茨城に戻った家族との暮らしのなかで、段々に大きくなる子供たちと演奏会に出かける頻度が増えていくことが、私の新しい喜びとなった。

そして3年前、音楽好きに育った娘二人と一緒に、私は水戸芸術館のパイプオルガンの前に座っていた。室住先生に優しく手ほどきを受けたパイプオルガン一日体験。ラフマニノフ「ロマンス」、バッハ＝グノー「アヴェ・マリア」、エルガー「ニムロッド」を弾き、最後に私が最も愛するオルガン曲であるフランク「前奏曲、フーガと変奏曲」を3人がかりで右手、左手、足を担当して演奏。私の人生における大事な思い出をもらった。

そして今般の災禍。演奏会に通い続けていた私が、それをできない辛い日々が続いた。音楽に渴望し続けていた私が4カ月ぶりにライブ演奏に触れられたのは、水戸芸術館での30分だけのパイプオルガン・ミニ演奏会。体験会の時にお世話になった室住先生が弾くオルガンの響きに全神経を集中させて聴き入った。特に嬉しかったのはあの大好きなフランクの曲を弾いてくれたこと。マスクをして独りで聴きながら、娘たちと3人で分担して同じ曲を弾いたあの日のことが頭をよぎり、平和に過ごせることのありがたさをしみじみ感じた。

人生に芸術は必要だ。水戸芸術館とパイプオルガンに救われながらその思いを噛みしめた。

好奇心いっぱいの体験

中村 広子

パイプオルガンの独特な音色と子ども達の歌声が、エントランスホール中に響き、私を丸ごと包んでしまう時、心が震えいつも鳥肌が立つのです。

毎年の様に、未就学児と一緒にパイプオルガンの体験企画に参加していました。

初めて聞くパイプオルガンの音色に驚く子ども達。でも音楽を聞きながら、わくわく感が抑えきれなくなった頃、クイズが始まります。パイプは全部で何本、一番長いのは、一番短いのは、何で出来てる…等。聞かれる度に興味津々、どんどん前のめりになっていきます。

見聞きするだけではありません。子ども達は実際にパイプオルガンを弾くのです。初めは一本の自分の指で鳴らした音に目を丸くして感激し、あとはオルガニスト気分で大胆になっていきます。自分で響かせているパイプオルガンの音色に酔いしれながら。

園で描いた絵では、黒鍵と白鍵が逆に表現され、よく見ていた事が伺えます。画用紙の裏にもパイプの絵を描く子も、隠れて見えないパイプが有るからの事。各ご家庭では、にわかパイプオルガン博士が誕生。何度も何日もクイズ大会が開催されたそうです。

こんなにもパイプオルガンを身近に感じられる都市が他にあるでしょうか！芸術館は水戸のいえ世界の宝です。これからも、輝く笑顔を創り続けることを願っています。

水戸芸術館のオルガンにおもうこと

長谷川 庸熙

水戸芸術館の誇れるものの一つにパイプオルガンがある。エントランスホール内に設置されたそれは、見上げるほどの高さでもなく、2階に上がれば演奏者の目線となり、とても身近な存在だ。週末には無料のプロムナードコンサートが開催され、散歩や買い物がてらの市民も気軽に立ち寄ることが出来る。古今の作品がすぐれた奏者によって、迫力ある生演奏で鑑賞できることは水戸に住む者のメリットの一つに数えられるだろう。私自身もこうした機会を享受すべく日々通う次第である。座して聴いていると、設置された環境もあいまって自分があたかも日曜礼拝の教会に居るように感じられるときがある。鑑賞の行為そのものがある種神聖なものに思えるから不思議なものである。

ここで演奏した奏者は数知れず。マリー＝クレール・アラン、トン・コープマン等々枚挙に暇がないが、初代の音楽部門主任学芸員の室住素子さんも印象深い。現在もレクチャーコンサート等でご活躍だが、サントリーホールで茨城交響楽団と協演されたオルガン交響曲も忘れ難い。このように多くのソリストによって演奏されてきたオルガンも東日本大震災では甚大な被害をこうむることとなった。修復には年単位の時間を要し、状況は逐次報道された。そして、遂に待ちに待った復活お披露目の日がやってきた。当日は2階まで超満員。立錐の余地なく、まさに鈴なりの状態となった。あれだけ多くの人がホールに詰めかけたのは後にも先にも無いのではないだろうか。その光景はホールに鳴り響いた音色とともに感動的であり、今も心に焼き付いている。こうした市民に近い存在のオルガンが、より多くの人々によい音楽と「音楽のある空間」を提供し続けてくれることを願ってやまない。

プロムナードコンサートにて

お絵かきうさぎ

芸術館には、よく訪れた。

美術の企画展が主だったが、他にも記憶に残る経験は多い。斬新なオブジェをみ、そぞろな耳に響いたパイプオルガンの演奏も、その場に行ってはじめて体験したものだ。情報では、パイプオルガンがある施設だと知ってはいた。

しかし、回廊のレリーフと化したようなその存在は、音がならないときは、非日常の空間にしっくりと収まる、建造物の一つとしてしか目にしていなかった。

とある企画展の際に、週末にはパイプオルガンのコンサートがあるらしいと知った。時は週末、吹き抜けた開けた空間に人々が三々五々と集まり、私たちもそこに加わった。

なんという音色だったか。

パイプオルガンの音は知っているはずだった。オルガンでなくても気を惹く演奏会に足を運ぶくらいには、音楽に親しんでいたし好きでもあった。だが、直に鼓膜をふるわす深く重厚な響きは胸を熱くし、私は思わずハンカチを探した。

演奏に伴い、様々な解説もあったと思う。ただ何も覚えていない。なんの曲か、誰の演奏であったか。不意に聴衆となった無防備な私は、いきなり胸を突かれ、心を揺さぶられた。その衝撃は今でも鮮明に覚えているのに。

まだ若かった私は、何でもないふりをするのに大変苦労した。この荘厳な音色と共に、ただ跪いて頭を垂れ、祈ったであろう古の人たちを思い浮かべた。これなら神の言葉も人々の心に届くかもしれないなと思うことで、一人涙を浮かべ動揺している自分を、なだめていたように思う。

今なら躊躇なく涙を流し、感うことなく堪能しただろうに。当時の私は、何かにここまで感激を受けたことに恥ずかしさを覚え、平静を装う人間だった。泰然とした友人の横で私は頭をくらくらさせながら、圧倒され続けていた。

何に感銘を受けたのだろうか？今でもふいに、心打たれ涙がこみ上げる事はある。今きいても同じ思いができるのだろうか？あの場所で、パイプオルガンの演奏に。

人生の転換点―聴くから弾くへ

寺内弘志

「オルガニストになりたいです。」

こう言ったのは僕が小学四年生の時。初めて受講した市民のためのオルガン講座の発表会の場だった。当時はオルガニストの大変さも、オルガンの奥深さもよくわからないまま、大勢の観客の前で公言したのだ。

僕のパイプオルガンとの出会いは、もう少し前。一年生のある日、芸術館の広い芝生で遊んでいるとピアノではない音が聴こえてきた。

「何の音だろう。」音に誘われるまま中に入ってみた。「うわっ。」上から音が降ってきた。それは、たくさんのパイプから出る、綺麗な音色。まだ小さかった僕は、全身で受け止めた。はじめは、どこから音が鳴っているかもわからなかった。しかし、パイプの音は僕の心を動かしていたようだ。

それから後、その音色に魅せられ、よくコンサートに通った。

時が経ち、芸術館で「市民のためのオルガン講座」があることを知った。丁度ピアノも上達してきた時でもあり、早速応募した。

嬉しいことに、いつもは聴く側だった日々が、弾く側になったのだ。

レッスンを受けるにつれて、パイプオルガンの魅力にたくさん気づくことができ、益々好きになった。

発表会が近づき、レッスンが終わるたびに寂しい気持ちになった。

「もっと弾き続けていたい。」

「そうだ。仕事にしちゃおう。」

芸術館のパイプオルガンは、きっと僕が大人になっても多くの人に見守られ、その音色は生き続けるだろう。

僕に夢を与えてくれた芸術館のパイプオルガンに感謝し、オルガニストになれた時には弾く側の一人として大切に守っていきたいと思う。

おわりに——

千年以上もの昔からヨーロッパなどの教会で、神に仕えてきたオルガンは、教会を離れ、宗教を離れても、やはり「祈り」を奏でる楽器なのだと思います。

東日本大震災の時は、水戸芸術館も被害に遭い、オルガンも壊れてしまいましたが、震災から1年後の2012年4月のオルガン復活コンサートでは、復興の象徴として地域の方々が我がこのように喜んでくださり、1,800人の方が会場に集まってくれました。そして現在のコロナ禍。当館では、2020年3月から約半年間にわたって臨時休館となってしまいましたが、そのような状況のなかで唯一開催できたのが、エントランスホールでのオルガン演奏会でした。

不条理な災厄や人間の抗えない宿命を前にして、悲しみを乗り越え、希望を失わないために、大いなる存在に祈りを捧げる——そんな人間の営みとともに歩んできたのがオルガンなのだと思います。そして、そのような音楽のあり方は、オルガンにとどまらず、当館で開催するすべての演奏会に当てはめることができるだろうと、私は思うようになりました。

三十余年の活動を振り返り、水戸芸術館のオルガンのもとに、多くの人がかかわってくださったことに、心より感謝申し上げます。開館当初、オルガン事業の立ち上げに携わった当館音楽部門の初代芸術監督の小口達夫さん(現・水戸室内管弦楽団名誉顧問)とご助力いただいたオルガニストの廣野嗣雄さん(現・東京藝術大学名誉教授)。オルガンを通して人を繋ぐ礎を作ってくれたオルガニストの室住素子さん。「幼児のため

のオルガン見学会」の講師を、室住さんの後を継いで20年近くも務めてくださっている浅井美紀さん。また、これまでにおよそ200人のオルガニストの方々が水戸のオルガンを弾きに来てくれました。そして、何よりも有り難いのが、オルガンを聴きに来てくださる、見学会や講座に参加してくださる、皆様の存在です。あらためて御礼申し上げます。

水戸芸術館のオルガンも、ヨーロッパの歴史的なオルガンと同じように、何百年にもわたって鳴り続けることを夢見ています。人を繋ぎ、時を繋ぎ、神様が宿る大樹のようなオルガンになりますように、これからも皆で育て上げていきたいとあらためて考えています。

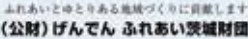
水戸芸術館音楽部門 芸術監督
中村 晃

水戸芸術館 概要

名 称	水戸芸術館 (Art Tower Mito)
所 在 地	茨城県水戸市五軒町1-6-8
設 置 者	茨城県水戸市
設 計	株式会社 磯崎新アトリエ
主体構造	鉄骨鉄筋コンクリート造、鉄筋コンクリート造、鉄骨造(塔)
敷地面積	14,441.40㎡
建築面積	6,873.91㎡
床 面 積	16,138.34㎡
階 数	地下2 階、地上4 階
施 設	コンサートホール 620～680席 劇場 472～636席 リハーサル室 3室 展示室 9室 壁面長285m 会議場 78席 塔 100m 展望室86.4m ミュージアムショップ、コーヒーラウンジ、レストラン 地下駐車場 217台 市営五軒町駐車場
館 長	吉田秀和(1988年12月～2012年5月) 小澤征爾(2013年4月～現在)



水戸芸術館の活動を支援しています (50音順)

 株式会社 葵建設工業 http://www.a-oi.net	 ADASTRIA Play fashion!	 いつも親切 MRLA 茨城県信用組合	 茨城交通株式会社
 Joyonet	 ANA	 ふれあいとゆとりある地域づくりに貢献します (公財) げんでん ふれあい茨城財団	 SUNTORY
 常陽銀行	 MEBUKI めぶきフィナンシャルグループ	 豊かな未来へ、よりよい環境作り 第一熱学	 東京ガス TOKYO GAS
 その先の答えを共に考える。 株式会社 BC Next ビジコネクスト	 オーダーメイド ソフトウェアで社会をよりよく。 PENGUIN SYSTEM ペンギン システム 株式会社	 すべてのお客様の「ありがとう!」のために。 Honda Cars 茨城南	 水戸京成ホテル
 MITO 水戸証券	 山新 YAMANASHI SECURITIES	 吉田石油	 新しい都市景観創造 和知商事株式会社

水戸芸術館のパイプオルガンについて

1990年、東京都町田市のマナオルゲルバウ社製で、日本人の手で作られたオルガンとしては国内最大級の規模を誇ります。

3段の手鍵盤とゆるやかな放射状の足鍵盤、3,283本のパイプを持ち、46種類の音色を組み合わせで多彩な音色を生み出すことができます。残響時間は空席時4秒、満席時2.3秒で、エントランスホール全体がオルガンの共鳴箱のような役割を果たしています。教会の空間さながらの豊かな響きをお楽しみください。



こちらからオルガンのご紹介動画をご覧ください。



パイプ総数：3,283本 ストップ数46

カ プ ラ ー：Ⅰ/ⅡⅢ/ⅡⅢ/ⅠⅠ/PⅡ/PⅢ/P

音 域：手鍵盤 C-a3 58音、ペダル C-g1 32音

手 鍵 盤：ドイツ標準規格／ナチュラルキー／グラナディラ材

半 音 キ ー：ローズウッド牛骨張り

足 鍵 盤：ドイツ標準規格／放射状ペダル／オーク

オルガンケース：北米産ホワイトオーク

寸 法：高さ：7.9m(2FLより7.2m)、幅：7.68m、奥行き本体：3.48m(足鍵盤込3.94m)

調 律 法：ナイトハルトⅠ(1724年)

■ストップリスト

I. Brustwerk

第1鍵盤: ブルストヴェルク

1. Holzgedackt (ホルツゲダクト)	8'
2. Principal (プリンシパル)	4'
3. Rohrflöte (ロールフレーテ)	4'
4. Flachflöte (フラッハフレーテ)	2'
5. Quinte (クインテ)	1 1/3'
6. Sesquialtera (セスキアルテラ)	2f.
7. Scharff (シャルフ)	3f.
8. Cromorne (クロモルネ)	8'
9. Vox humana (フォックスフマーナ)	8'
--Tremulant-- (トレムラント)	

III. Schwellwerk

第3鍵盤: シュヴェルヴェルク

22. Pommer (ボンマー)	16'
23. Geigenprincipal (ガイゲンプリンシパル)	8'
24. Schwebung ab c° (シュヴェーブング)	8'
25. Koppelflöte (コッペルフレーテ)	8'
26. Ital. Principal (イタリアンプリンシパル)	4'
27. Traversflöte (トラヴェルスフレーテ)	4'
28. Nasat (ナサート)	2 2/3'
29. Waldflöte (ヴァルトフレーテ)	2'
30. Terz (テルツ)	1 3/5'
31. Mixtur (ミクストゥール)	4f.
32. Fagott (ファゴット)	16'
33. Hautbois (オーボエ)	8'
34. Schalmei (シャルマイ)	4'
--Tremulant-- (トレムラント)	

Nachtigal (ナイチンゲール)

Zimbelstern (ツィンベルシュテルン)

II. Hauptwerk

第2鍵盤: ハウプトヴェルク

10. Principal (プリンシパル)	16'
11. Principal (プリンシパル)	8'
12. Rohrgedackt (ロールゲダクト)	8'
13. Oktave (オクターヴェ)	4'
14. Blockflöte (ブロックフレーテ)	4'
15. Quinte (クインテ)	2 2/3'
16. Oktave (オクターヴェ)	2'
17. Cornet ab f° (コルネ)	5f.
18. Mixtur (ミクストゥール)	4f.
19. Cymbel (ツィンベル)	3f.
20. Trompete (トランペット)	8'
21. Trompete (トランペット)	4'

Pedal

足鍵盤: ペダル

Groß-Pedal	
35. Principal (プリンシパル)	16'
36. Oktave (オクターヴェ)	8'
37. Choralbaß (コラルバス)	4'
38. Hintersatz (ヒンターザッツ)	4f.
39. Posaune (ポザウネ)	16'
40. Trompete (トランペット)	8'
Solo-Pedal	
41. Subbaß (サブバス)	16'
42. Quintbaß (クイントバス)	10 2/3'
43. Gemshorn (ゲムスホルン)	8'
44. Manafloete (マナフレーテ)	2'
45. Baßzink (バスツィンク)	3f.
46. Clairon (クレロン)	4'
--Tremulant-- (トレムラント)	

水戸芸術館パイプオルガン活動記録集 1990～2021 つくる、かなでる、ひろがる

2022年1月28日発行

編集：鴻巣俊博、高巣真樹

撮影：田澤純、山崎宏之、仲田絵美

デザイン：K5 ART DESIGN OFFICE.

印刷・製本：山三印刷株式会社

発行：公益財団法人 水戸市芸術振興財団

〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8

©水戸芸術館 / Art Tower Mito, Printed in Japan

水戸芸術館
ART TOWER MITO